

西脇市

前島・検上田遺跡

— (一) 中安田市原線 交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和 2 (2020) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

西脇市

前島・検上田遺跡

— (一) 中安田市原線 交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和 2 (2020) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

- 1 本報告書は（一）中安田市原線交差点改良事業に伴って実施した西脇市前島町に所在する前島・検上田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は、兵庫県教育委員会が兵庫県北播磨県民局 加東土木事務所の依頼を受け、公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センターが実施した。
- 3 現地における発掘調査は、公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 調査第1課 主任技術専門員 村上泰樹、調査第2課 臨時の専門職員 西山昌孝が担当し、平成30年7月3日に着手し、平成30年8月30日に終了した。また、平成31年4月1日より出土品整理を進め、令和2年3月25日に報告書を刊行し、令和2年3月31日に完了した。
- 4 本報告書の執筆・編集は 西山が行った。
- 5 本報告書に使用した周辺遺跡の分布図は、国土地理院1/25,000「中村町」を使用した。
- 6 本報告書にかかる遺物・図面・写真等は兵庫県立考古博物館、および魚住分室で保管している。
- 7 発掘調査および整理作業では、下記の方々からご教示・ご指導を得た。
山本博之（前島区長）、川口絹次（大木区長）、藤井顕三（市原区長）、村井雅文、村井義幸
菅澤敏弘・岸本一郎（西脇市教育委員会）

（順不同、敬称略）

凡　　例

1 本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づいている。図中のX・Y座標は国土座標第V系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。

2 標高は東京湾平均海面（T.P.）で示した。

3 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠、竹原秀雄『新版標準土色帖』2005年を使用した。

4 本書での遺構名は、下記の通り種別ごとの略号を用いた。

SB：掘立柱建物 SK：土坑 SH：竪穴住居 P：柱穴（図中では省略）

5 土器の断面は、弥生土器・土師器を白抜き、須恵器を黒塗り、貿易陶磁器・陶磁器を網掛とした。

なお、金属製品・鉄滓は番号の頭にMを付した。

目 次

例 言

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過

　　第1節 調査に至る経緯 1

　　第2節 調査の方法 1

第2章 周辺の環境

　　第1節 地理的環境 3

　　第2節 歴史的環境 3

第3章 調査の成果

　　第1節 調査の概要 5

　　第2節 基本層序 5

　　第3節 遺構と遺物 8

第4章 総 括

　　第1節 遺構の変遷 21

　　第2節 条里遺構とSD01 22

報告書抄録

挿図目次

図1 遺跡の位置図

図2 調査区位置図

図3 調査区配置図

図4 日野北部地形分類図

図5 周辺遺跡の分布図

図6 遺構配置図

図7 西壁土層断面図

図8 SH01 平面図・断面図

図9 SH01 出土遺物

図10 SB01 平面図・断面図

図11 SB01 出土遺物

図12 SD01・02・03・04・05 平面図・断面図

- 図 13 SD01・02 出土遺物
 図 14 SK01・02 平面図・断面図
 図 15 SK01 出土遺物
 図 16 SK03 平面図・断面図
 図 17 SK03 出土遺物
 図 18 包含層出土土器 (1)
 図 19 包含層出土土器 (2)
 図 20 鉄製品・鉄滓
 図 21 遺構の変遷
 図 22 条里遺構と SD01

表 目 次

- 表 1 出土土器観察表 (1)
 表 2 出土土器観察表 (2)
 表 3 出土鉄製品観察表

写真図版目次

- 写真図版 1 調査区全景、調査区北側
 写真図版 2 SH01 検出状況・完掘状況
 写真図版 3 SH01 遠景、SB01 完掘状況
 写真図版 4 SD01・03 完掘状況、SD01 土層断面
 写真図版 5 SK01 遺物出土状況・完掘状況
 写真図版 6 SK03 遺物出土状況
 写真図版 7 出土遺物 (1)
 写真図版 8 出土遺物 (2)
 写真図版 9 出土遺物 (3)
 写真図版 10 出土遺物 (4)

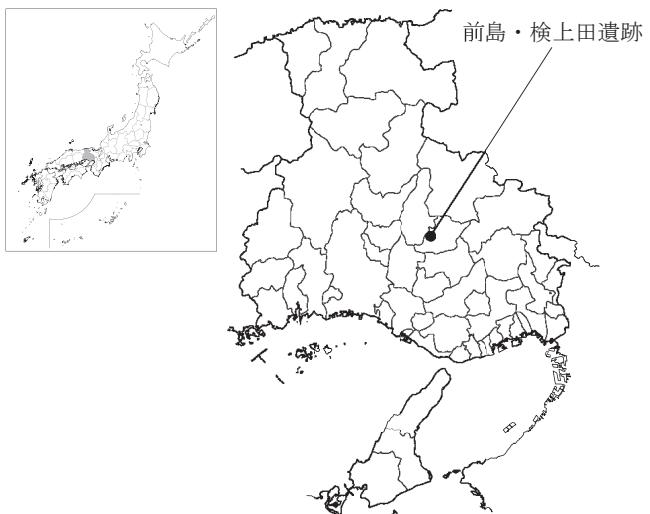


図 1 遺跡の位置図

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

兵庫県北播磨県民局加東土木事務所では、(一) 中安田市原線交差点改良事業を進めている。事業地の北側、西脇市施工部分には、周知の埋蔵文化財包蔵地「野中・国影遺跡（県遺跡地図番号 140008）」が近接することから、平成 30 年 1 月に確認調査を実施した。調査の結果、事業地内で溝等の遺構が確認され、遺跡が存在することが明らかになった。この結果を受け、兵庫県教育委員会は兵庫県北播磨県民局加東土木事務所（以下、加東土木事務所）と遺跡の取り扱いについて協議し、北播磨県民局長よりの平成 30 年 5 月 10 日付 北播（加土）第 1084 号に基づき本発掘調査を実施することになった。本発掘調査は兵庫県教育委員会より委託され、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター（以下、兵庫県まちづくり技術センター）が実施した。

第2節 調査の方法

1. 確認調査

兵庫県教育委員会は加東土木事務所の依頼を受け、(一) 中安田市原線交差点改良事業に伴う埋蔵文化財確認調査(2017102)を実施した。事業範囲内に 17 カ所の確認トレンチを設定し調査を行った。旧耕作土の下には良好な遺物包含層を確認し、そのうち 3 カ所で遺構を検出した。調査面積は 65 m²である。

2. 本調査

調査区内では、耕作土直下に 4 層の遺物包含層が確認された。なかでも、遺物密度の希薄な最上層の包含層（Ⅱ層）まではバックホーによる機械掘削、下層の包含層（Ⅲ-1a・Ⅲ-1b・Ⅲ-2 層）、および遺構は人力掘削を行った。掘削した残土は、調査区南側事業地内、および調査区西側に設定した残土置

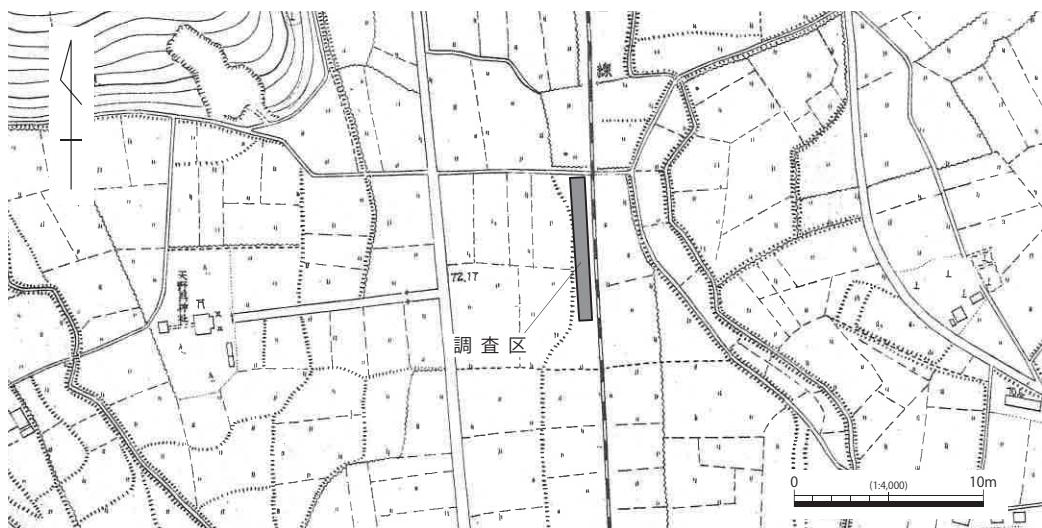


図2 調査区位置図

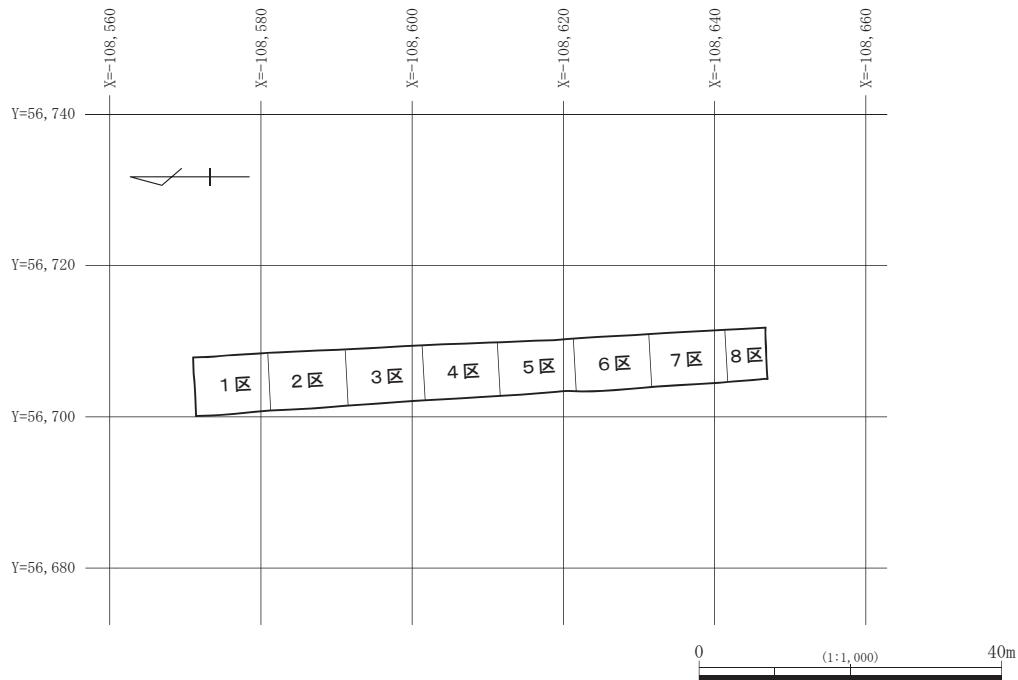


図3 調査区配置図

場に耕作土とそれ以外の残土を分けて仮置きした。

検出した遺構等は、必要に応じ写真撮影・平面実測図・土層断面図等の記録を行った。遺跡の全体写真撮影、および遺構配置図等の作成は空中写真測量を行った。遺物は、調査区北端を起点 No. 0として10 m毎にグリッドを設定し、No. 0～1を1区、最終区を8区として採り上げた。

3. 出土品整理作業

整理作業は、本発掘調査と同じく加東土木事務所と兵庫県教育委員会が契約を交わし、兵庫県教育委員会からの委託を受けた兵庫県まちづくり技術センターが作業を実施した。

令和元年度に出土遺物の水洗いから接合・復元、実測作業、遺物の写真撮影および遺構・遺物のトレイスを実施し、報告書の原稿執筆および編集作業を行った。整理作業は兵庫県立考古博物館で行った。

〔整理体制〕

調査主体：兵庫県教育委員会

公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

事務担当：兵庫県立考古博物館

埋蔵文化財調査部整理保存課

名誉館長 石野博信

課 長 多賀茂治

館 長 和田晴吾

副課長 深江英憲

副館長 川由伸一

技術職員 大本朋弥

埋蔵文化財課

大嶋昭海

課 長 鐵 英記

嘱託員 宮田麻子

参 事 平田博幸

平宮可奈子

副課長 菅田淳子

技術職員 渡瀬健太

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境

本遺跡は兵庫県の中部、兵庫県西脇市前島町に所在する。市域の中央には加古川が流れしており、その支流である杉原川の下流、西岸に位置する。この一帯は日野北部平野と呼ばれており、本遺跡の周辺には北西側に派生する丘陵（平野山）と南西側の丘陵（チバ山）がある。調査地は、これらに挟まれた谷から発生する扇状地と、東側に流れる杉原川が形成した中位沖積面の境に立地している。

第2節 歴史的環境

本遺跡の西北側には隣接して平野神社遺跡（2）がある。丘陵上には大木・平野山古墳群（3）、西側には大木・郡新田遺跡（4）、谷を挟んで南側の丘陵にチバ山遺跡第3地点（12）がある。北側には野中・国影遺跡（6）、野中・前遺跡（8）、ハゼノ木遺跡（7）、羽安・横長遺跡（9）がある。

ハゼノ木遺跡からは縄文時代後期の深鉢が出土している。弥生時代の集落は弥生時代後期中葉の大木・郡新田遺跡、弥生時代後期の野中・前遺跡がある。古墳時代は後期から終末期の大木・平野山古墳群などがあるが、集落は確認されていない。

古代には、一帯は託賀郡都麻里に比定されている。ハゼノ木遺跡では奈良時代の西方建物群（倉庫群）が検出され、野中・国影遺跡で検出した様相とあわせて、官衙機能を担った施設と考えられている。近接する平野神社遺跡には天目一神社があり、現在、南東側に2基の礎石が残されている。以前は23基の礎石が報告され、字名から古代寺院跡として2棟の建物が復元されていた。ほかに同里の管理拠点と考えられている津万遺跡や野村廃寺がある。杉原川の両側に条里遺構が良く残っており、古代の開発の様子が窺える。

また、市内には市原新池1号窯（17）をはじめ古代から中世にかけての窯跡が多数あり、兵庫県指定文化財緑風台1・2号窯跡が保存・展示されている。

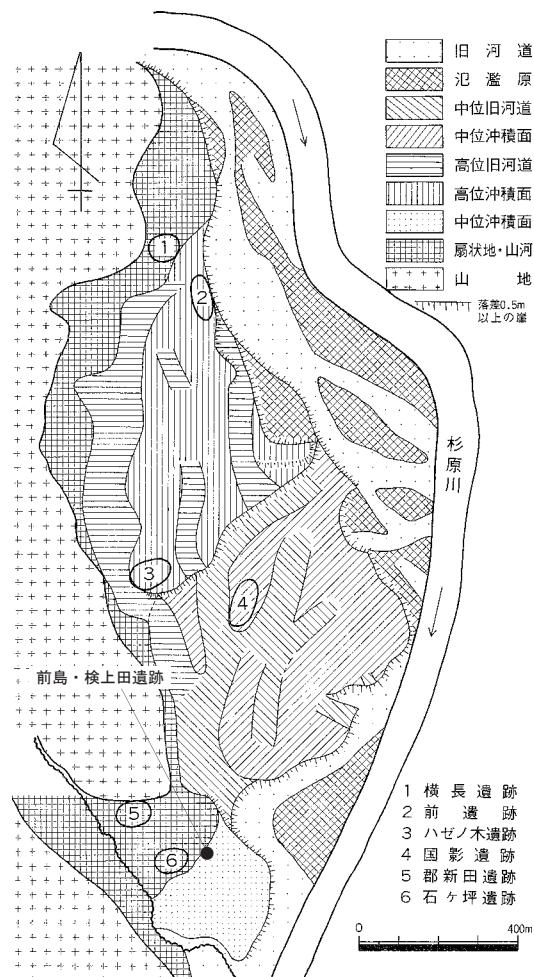
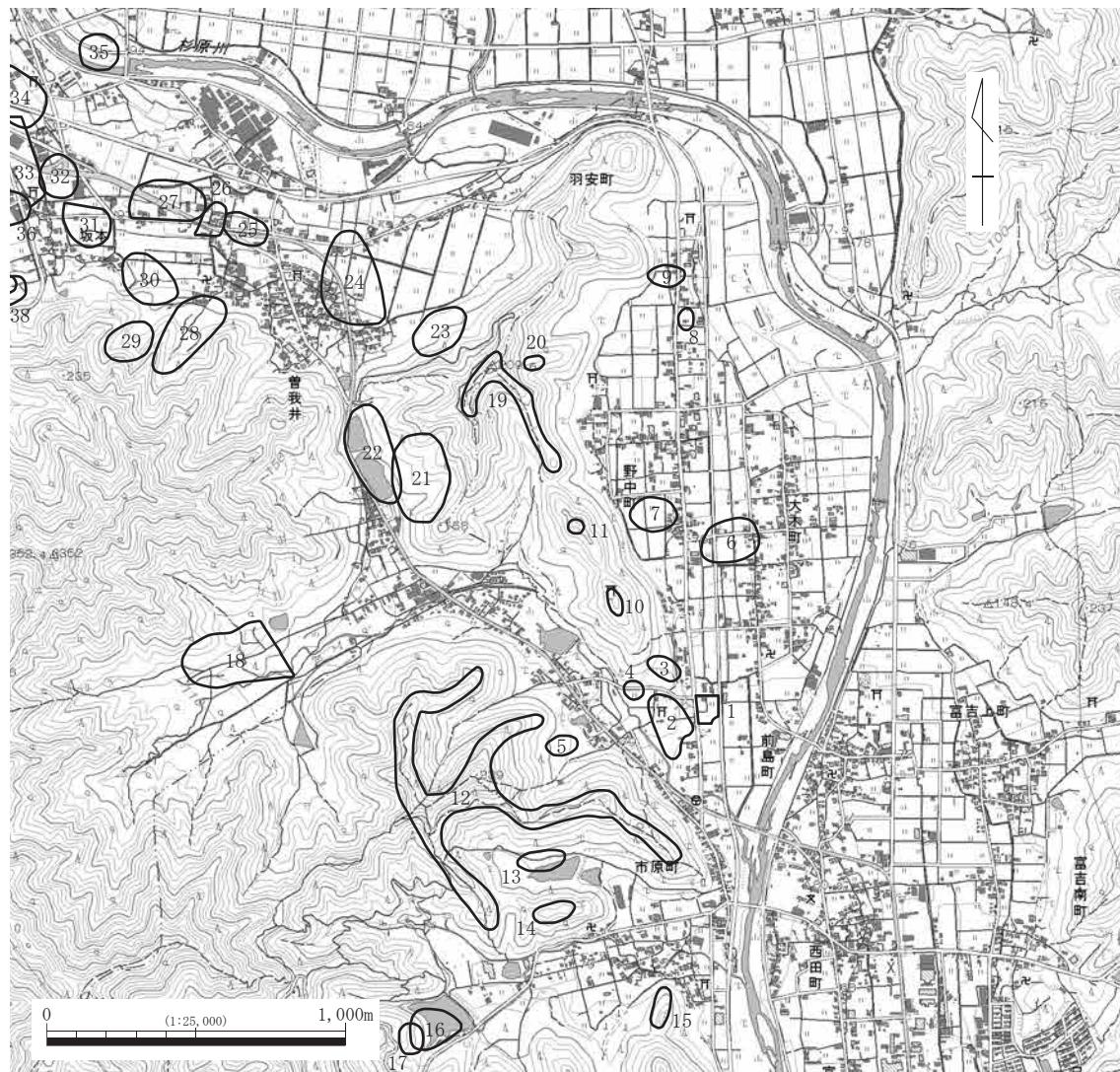


図4 日野北部地形分類図



- 1 前島・検上田遺跡 2 平野神社遺跡 3 平野山古墳群 4 大木・郡新田遺跡 5 奥ノ谷遺跡 6 野中・国影遺跡 7 ハゼノ木遺跡 8 野中・前遺跡 9 羽安・横長遺跡 10 大木城跡 11 小屋辻遺跡 12 チバ山遺跡 13 奥の池遺跡 14 寺山遺跡 15 南山遺跡 16 新池遺跡 17 市原新池1号窯跡 18 徳部野遺跡 19 小山遺跡 20 墓所谷遺跡 21 徳野部古墳群 22 曽我井逆池遺跡 23 曽我井古墳群 24 野入遺跡 25 堂ノ元遺跡 26 瓜生遺跡 27 沢田遺跡 28 大谷遺跡 29 スズケ谷遺跡 30 山田遺跡 31 丁田遺跡 32 土井畑遺跡 33 土井の後遺跡 34 里の垣外遺跡 35 森本近世墓 36 土井の内遺跡 37 坂本中世墓群 38 アンノ谷遺跡

図5 周辺遺跡の分布図

参考文献

- 西脇市教育委員会 1986 『ハゼノ木遺跡』 西脇市埋蔵文化財調査報告書2
 西脇市郷土資料館編 2006 『西脇市集落遺跡調査集報』 西脇市文化財調査報告I 西脇市教育委員会
 兵庫県教育委員会 2019 『津万遺跡群3』 兵庫県文化財調査報告第503冊
 兵庫県多可郡教育会 1922 『多可郡志』 兵庫県郷土誌叢刊 臨川書店

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

本遺跡は西脇市北西部の前島町に位置し、西側は多可郡多可町と境界を接している。この付近には杉原川が南流しており、西岸域では河岸段丘が発達し、山沿いの谷部に扇状地が形成されている。

この扇状地上には野中・国影遺跡等の弥生時代、古墳時代、飛鳥～奈良時代の遺跡が立地する。前島・検上田遺跡も大木町集落付近から前島町域に向かって発達した扇状地の先端部に立地する。

調査の結果、包含層を除去した段階で、古墳時代～奈良時代の堅穴住居、掘立柱建物、柱穴群、土坑、溝が検出された。調査面積は 540 m²である。

第2節 基本層序

本調査では、現地表面下約 0.6 mまでの土層を I～IV 層に大別し、そのうち III 層については 3 層に細分した。IV 層は地山である。なお、遺構検出面は、ベースとなっている層位と同じ名称を使用した。

I a 層 耕作土である。厚さ約 20～40cm を測る。

I b 層 床土である。厚さ約 12cm を測る。

II 層 2.5Y3/1 にぶい黄色シルト細～中砂 細礫混じりで、厚さ約 26cm を測る。調査区北端の東側のみに堆積する耕作土である。古代～中世の土器が出土している。

III -1a' 層 2.5Y3/1 黒褐色シルト細砂～中砂で、厚さ約 12cm を測る。III -1a 層が II 層の耕作の際に攪拌された層位で、調査区北端の東側のみに堆積する。

III -1a 層 2.5Y3/1 黒褐色シルト細砂～中砂 細礫混じりで、厚さ約 15cm を測る。奈良時代～中世の土器・サヌカイト片が出土している。

III -1b 層 2.5Y5/1 黄灰色粗砂～中礫 シルトブロック混じりで、厚さ約 6cm を測る。おもに弥生時代中期・古墳時代後期～奈良時代・平安時代の土器が出土している。

III -2 層 7.5YR4/1 褐灰色シルト極細砂で、厚さ約 12～15cm を測る。弥生時代中期・古墳時代後期後半の土器が出土している。

IV 層 2.5Y7/1 灰黄色シルト極細砂である。遺構面であるが、堆積は部分的に異なっている。調査区中央から礫を多く含む堆積となり、この部分に旧河道が流れていたと考えられる。遺物は出土しなかった。2.5Y6/8 明黄褐色シルトの旧河道から、遺物は出土しなかった。旧河道より南側の中礫混じり 2.5Y6/1 黄灰色シルトは扇状地の堆積にあたるであろう。遺物は出土しなかった。

遺構検出面の IV 層面は調査区の中央部付近から南側が高く、北東および東方向に向かって低くなっている。低位部分は II～III 層が堆積し、南西側の高位部分に行くに従い堆積は薄くなり、高位部分にあたる調査区中央付近から南側では III -1a 層、ないしは III -1b 層が 10 cm程度が残る。

III -1a 層と III -2 層の間層である III -1b 層は粗砂～中礫の砂礫で構成されおり、その分布も調査区の大部分に及んでいる。III -1b 層の堆積原因は西側谷部から供給された土石流と SD03 からの溢流と考えられる。

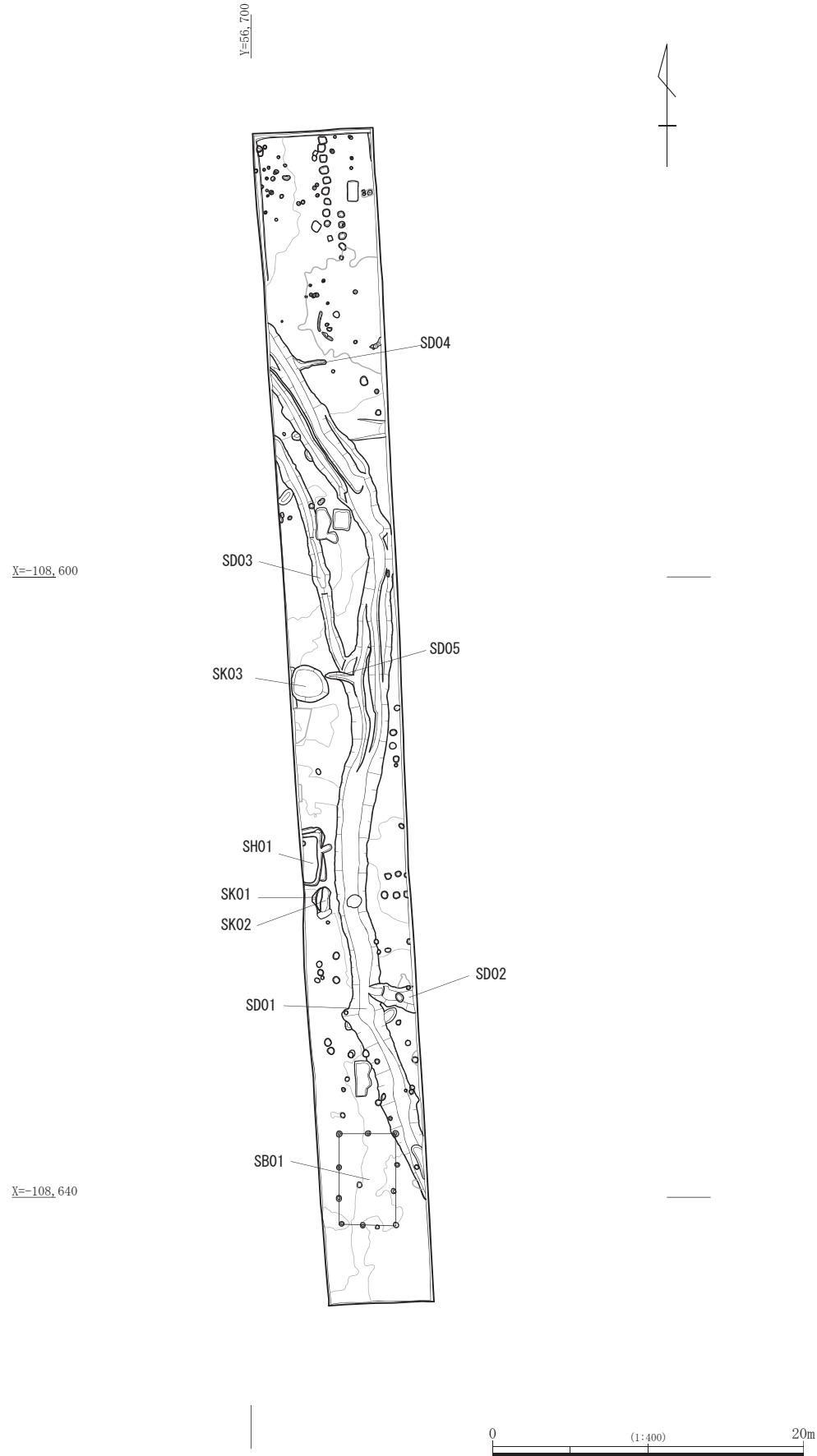
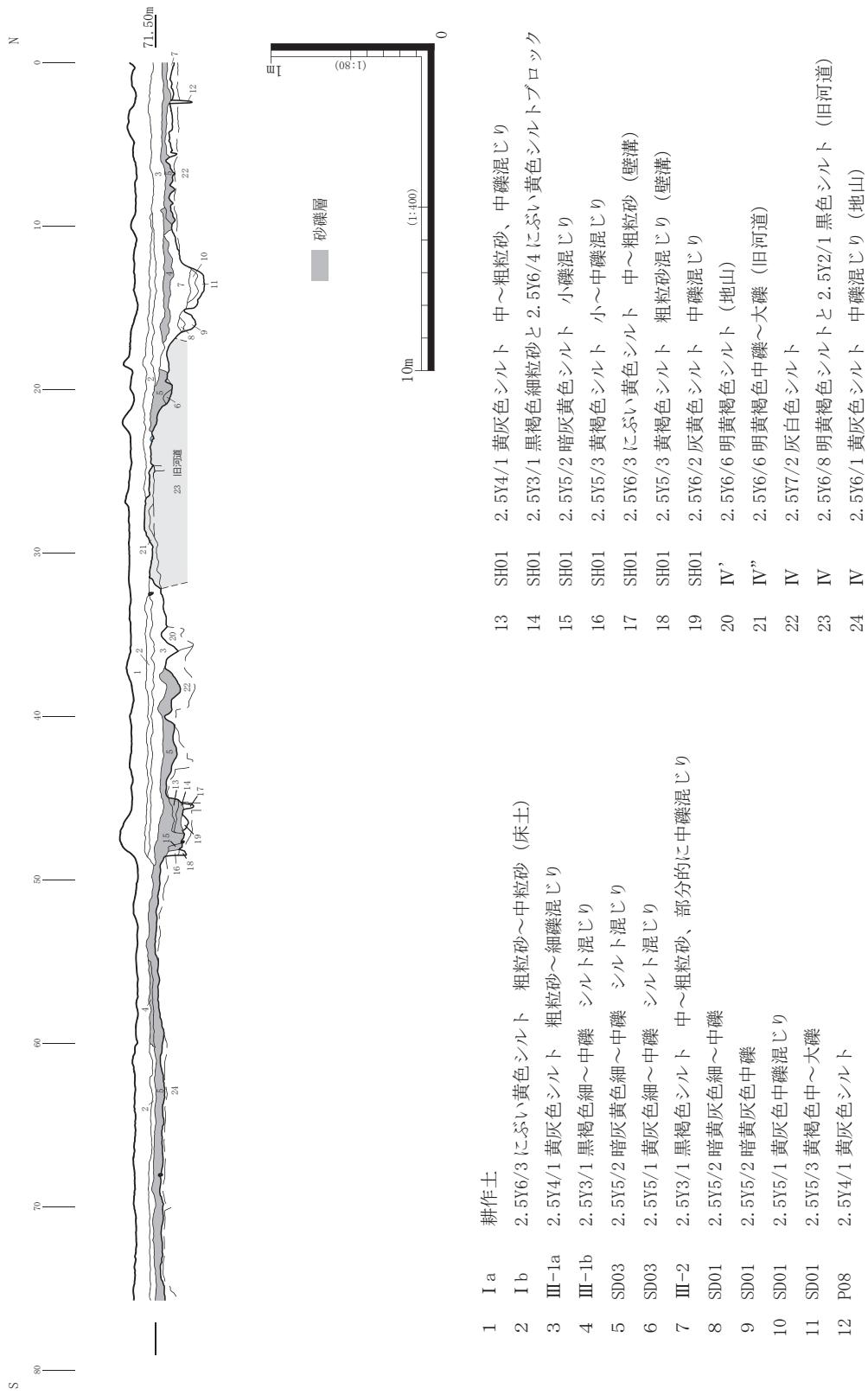


図6 遺構配置図



第3節 遺構と遺物

遺構面は1面で、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、溝5条、土坑3基、ピット等を検出した。

(1) 竪穴住居跡

SHO1 (図7・8、図版2)

調査区の中央部、西側に位置する。方形の竪穴住居で、西側部分は調査区外に延びる。主軸方位はN - 06° - W、南北3.4m、東西約1.2m、検出面からの深さは約17cmを測る。遺構の上面には、SD03からの溢流による攪乱が床面直上まで達している。なお、SH01の外側にも掘方があり、建物の建て替え、あるいは重複がある。

第1段階は、周囲に極浅い壁溝が巡る。幅22cm、深さ約10～12cmを測る。北寄りで浅いピットを検出したが、主柱穴とは考えにくい。主柱穴は調査区外へ延びるため検出できなかつたか、主柱穴のない小型の竪穴住居のため確認できなかつたと思われる。

第2・3段階は北側と東側に張り出した部分で、SD03からの溢流によって大きく攪乱されたため認識ができなかつたが、土層観察から上位の竪穴住居であったと考えられる。遺物は6世紀後半の須恵器杯身、7世紀の杯蓋や8世紀の須恵器杯Bや蓋摘まみ等が出土している。

1～4は須恵器杯である。1は杯身で比較的立ち上がりが高い。歪みは大きいが、体部は直線的に外傾することから時期は6世紀後半と思われる。2は立ち上がりが低い。時期は6世紀末から7世紀初めごろと考えられる。3は器壁が薄く、下膨れの器形で最大径が体部にある。時期は7世紀と思われる。4は杯Bである。高台を欠失するため詳細な時期は難しいが8世紀と思われる。

遺構の時期は、8世紀の遺物はSD03からの溢流が遺構を攪乱した際に混入と考えられることから、古墳時代後期と思われる。

(2) 掘立柱建物跡

SBO1 (図9・10、図版3)

調査区の南端部に位置する。棟軸方位を南北方向にもつ2×3間の側柱建物で、主軸方位はN - 01° - W、梁間約3.5m、桁行約6m前後を測る。北辺には直径約12cmのやや小さい柱穴2基を検出したが、建物に付属する施設のものと考えられる。

建物は12基の柱穴で構成されている。柱穴の堀方は楕円形で直径40cm×30cm前後、深さ35cmを測る。梁行の柱間P109-P127-P108が3.64m、P114-P113-P124が3.48mを測る。南辺のP113が西に寄る。桁行の柱間P109-P123-P112-P114が5.80m、P108-P126-P125-P124が5.93mを測る。遺物は土師器・須恵器が出土している。そのうちP124から8世紀ごろの須恵器杯蓋(5)、P125から8～9世紀ごろの土師器甕(6)が出土している。

5は須恵器杯蓋である。器高の高い蓋で、口縁部はやや丸みをおび内部に返しはない。時期は8～9世紀ごろと思われる。6は土師器甕である。中型の甕で、口縁部をく字に屈曲させる。体部外面に刷毛目がある。時期は8世紀と考えられる。

遺構の時期は、近接するSD01の埋没時期が10～12世紀ごろと考えられることから、それ以降に建てられたと思われる。

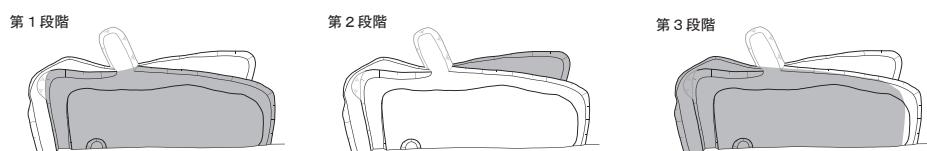
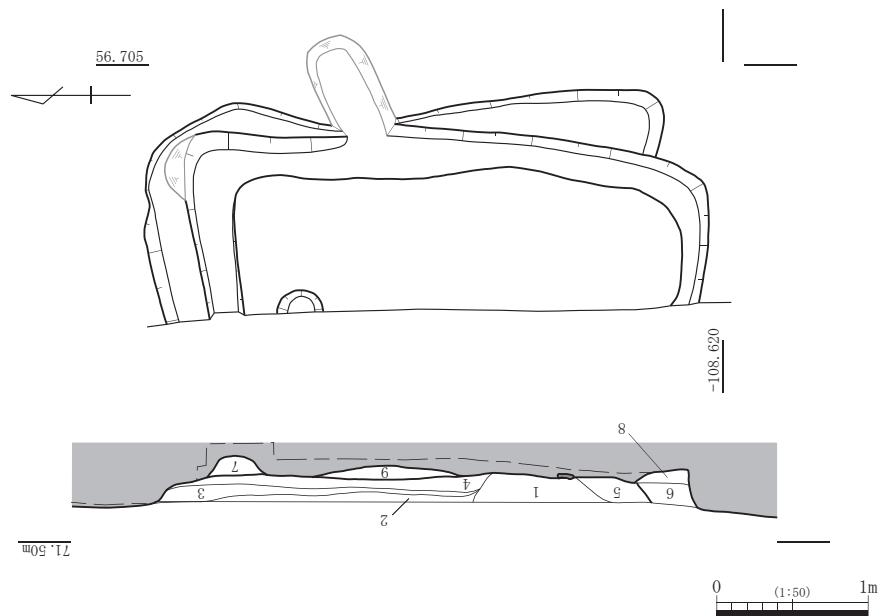


図8 SH01 平面図・断面図

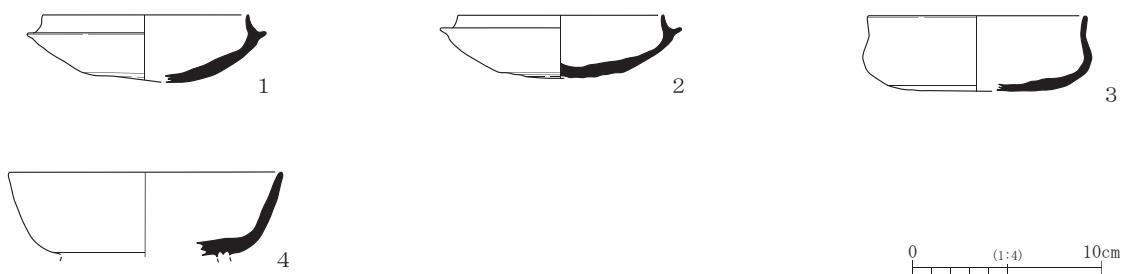
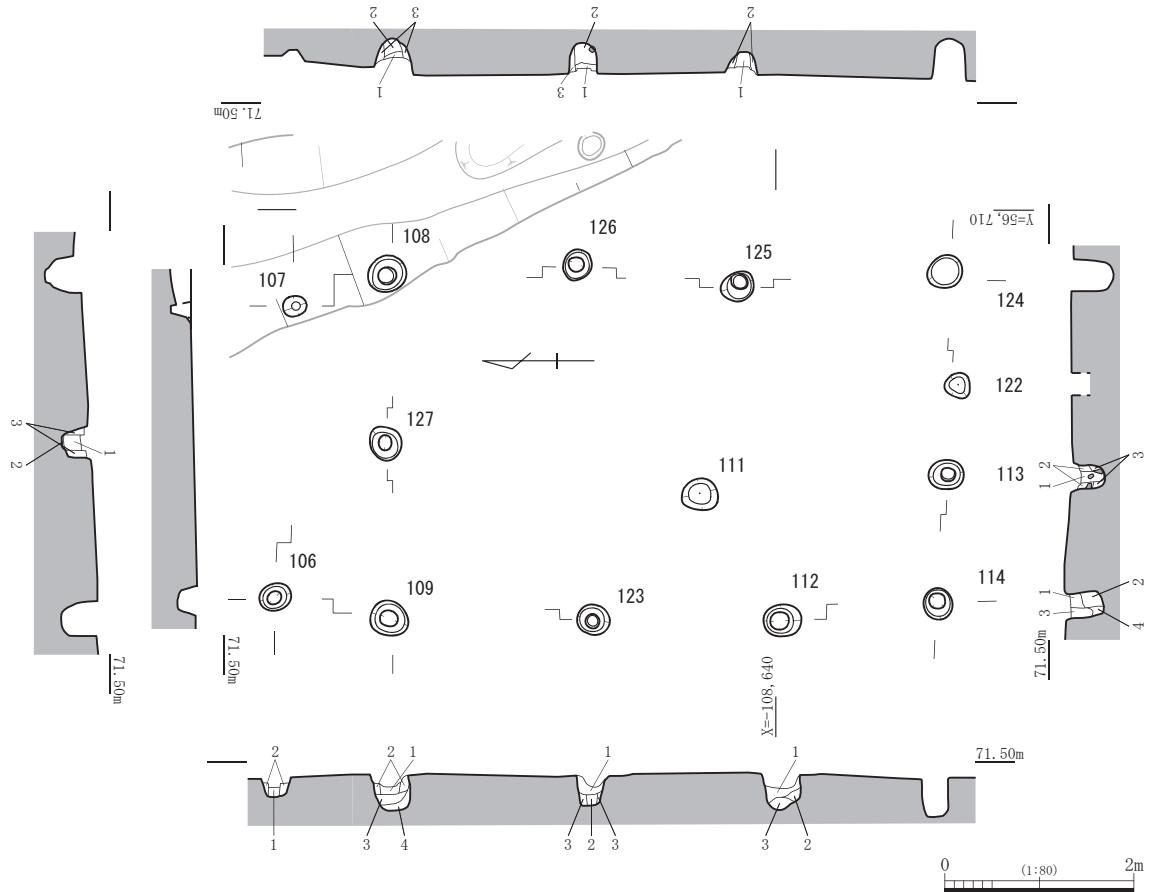


図9 SH01 出土遺物



P114

- 1 2.5Y6/2灰黄色シルト
- 2 2.5Y6/2灰黄色細～中礫 シルト混じり
- 3 2.5Y5/1黄灰色シルト
- 4 2.5Y5/1黄灰色細～中礫 シルト混じり

P113

- 1 N6/1 灰色シルト 中礫混じり
- 2 N6/1 灰色シルト 細～中礫混じり
- 3 2.5Y5/1黄灰色シルト 粗砂～細礫混じり

P125

- 1 2.5Y6/1黄灰色シルト 細礫混じり
- 2 2.5Y5/1黄灰色シルト 細～中礫混じり

P126

- 1 N5/1灰色シルト 細礫混じり
- 2 N5/1灰色シルト
- 3 2.5Y5/1黄灰色シルト 細礫混じり

P108

- 1 N6/1 灰色シルト 細礫混じり
- 2 N6/1 灰色シルト
- 3 2.5Y6/2灰黄色シルト 中礫混じり

P127

- 1 2.5Y6/1黄灰色シルト
- 2 2.5Y5/1黄灰色シルト
- 3 2.5Y5/1黄灰色シルト 中礫混じり

P109

- 1 2.5Y6/1黄灰色シルト
- 2 2.5Y6/1黄灰色シルト 細～中礫混じり
- 3 N6/1 灰色シルト 中礫混じり
- 4 2.5Y5/1黄灰色シルト 中礫混じり

P123

- 1 2.5Y5/1黄灰色シルト 細～中礫混じり
- 2 2.5Y6/1黄灰色シルト 細～中礫混じり
- 3 2.5Y6/1黄灰色細～中礫 シルト混じり

P112

- 1 N6/1 灰色シルト 細～中礫混じり
- 2 2.5Y5/1黄灰色中礫 シルト混じり
- 3 N6/1 灰色シルト

P106

- 1 N6/1 灰色シルト 細礫混じり
- 2 2.5Y6/1黄灰色シルト 中礫混じり

図 10 SB01 平面図・断面図



図 11 SB01 出土遺物

(3) 溝 (SD01 ~ 05)

調査区の北西部から南東方向に流れる溝である。SD02 は調査区中央よりやや北側で SD01 に連結し、SD03 は SD01 埋没後に流れた溝である。

SD01 (図 11・12、図版 4)

調査区中央に位置する。緩やかに蛇行する溝で幅 2 m ~ 3 m、深さは約 40 cm を測る。流下方向は北西から南東で、地形の変換点に沿って流れている。埋土は暗色化しているが礫を多く含み、北半では 2 条の溝に分層できる。遺物は①層から 10 ~ 12 世紀の須恵器椀や弥生土器など、②・③層からは弥生土器のほか、古墳時代後期から 7 ~ 8 世紀の土師器・須恵器が出土している。

7 ~ 16 は①層出土の弥生土器である。7 ~ 12 は甕である。7 は器壁が薄く、口縁端部に面をもち、小さく上方へ摘み上げる。8 ~ 12 は体部内面に刷毛目、外面にタタキ目を施す。8 は口縁端部に緩やかな面を持つ。11 は③層出土の遺物である。平底の中央がやや浮き上がり、外面にタタキ、内面にハケ目を施す。14 ~ 15 は壺である。14 は口縁端部を垂下させ、格子目状の沈線を施した後に円形浮文を貼り付ける。頸部に横方向の櫛目、頸部かと肩部の境に波状文を施す。16 は無頸壺の口縁部である。外面に沈線 3 条を施し穿孔する。17 は器台である。

遺構の時期は、図化できた土器は弥生時代後期の遺物のみであるが、①層出土遺物から須恵器椀片が出土しており、10 ~ 12 世紀ごろには埋没したと考えられる。

SD02 (図 11・12)

調査区の南側に位置する。SD01 の東岸に取り付く溝で幅 1.5 m、深さ 30 cm を測る。流下方向は東から西で、西端で SD01 へ流入する。遺物は弥生土器のほか、上層から 10 ~ 11 世紀の須恵器椀が出土している。

18 は弥生土器甕の底部である。平底の中央に直径 7 mm の穿孔を行う。表面は摩滅するが外面にミガキ、内面にハケ目を施す。

遺構の時期は上層出土遺物から、10 ~ 12 世紀ごろには埋没したと考えられる。

SD03 (図 11・12)

調査区の北側に位置する。SD01 の西側を北西部から南方向に流れる溝で、溢流して III-1b 層を形成した。調査区中央付近では SD01 の上を流れる。遺物は古墳時代前期の土師器から奈良時代の須恵器片が出土している。

SD04 (図 11)

調査区の北側に位置する。SD01 の東岸に取り付く溝で幅 30 cm、深さ 20 cm を測る。流下方向は東から西で、西端で SD01 へ流入する。遺物は出土しなかった。

SD05 (図 11)

調査区の中央に位置する。SD01 の西岸に取り付く溝で幅 50 cm、深さ 18 cm を測る。流下方向は西から東で、東端で SD01 へ流入する。遺物は出土しなかった。

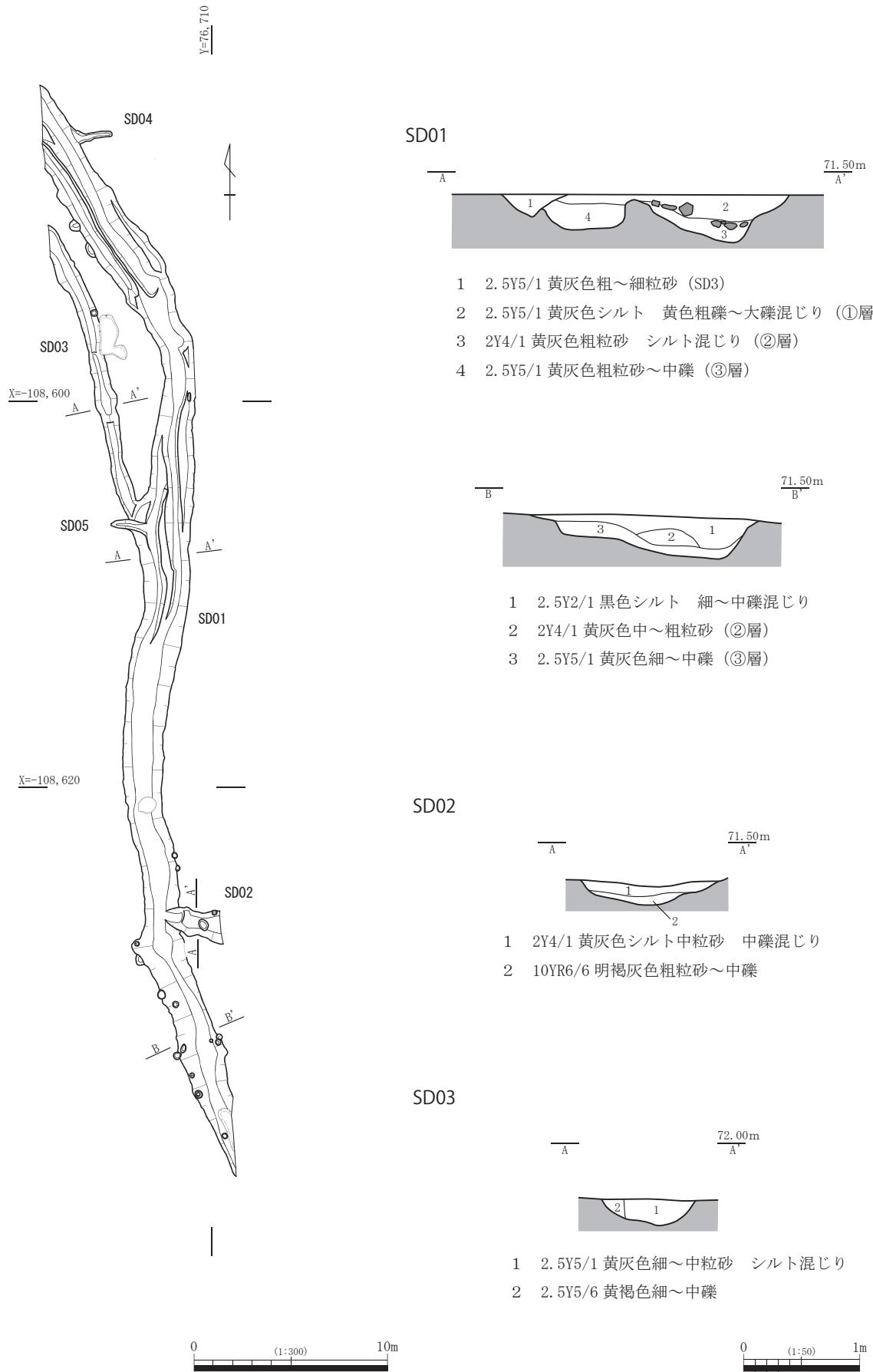


図 12 SD01・02・03・04・05 平面図・断面図

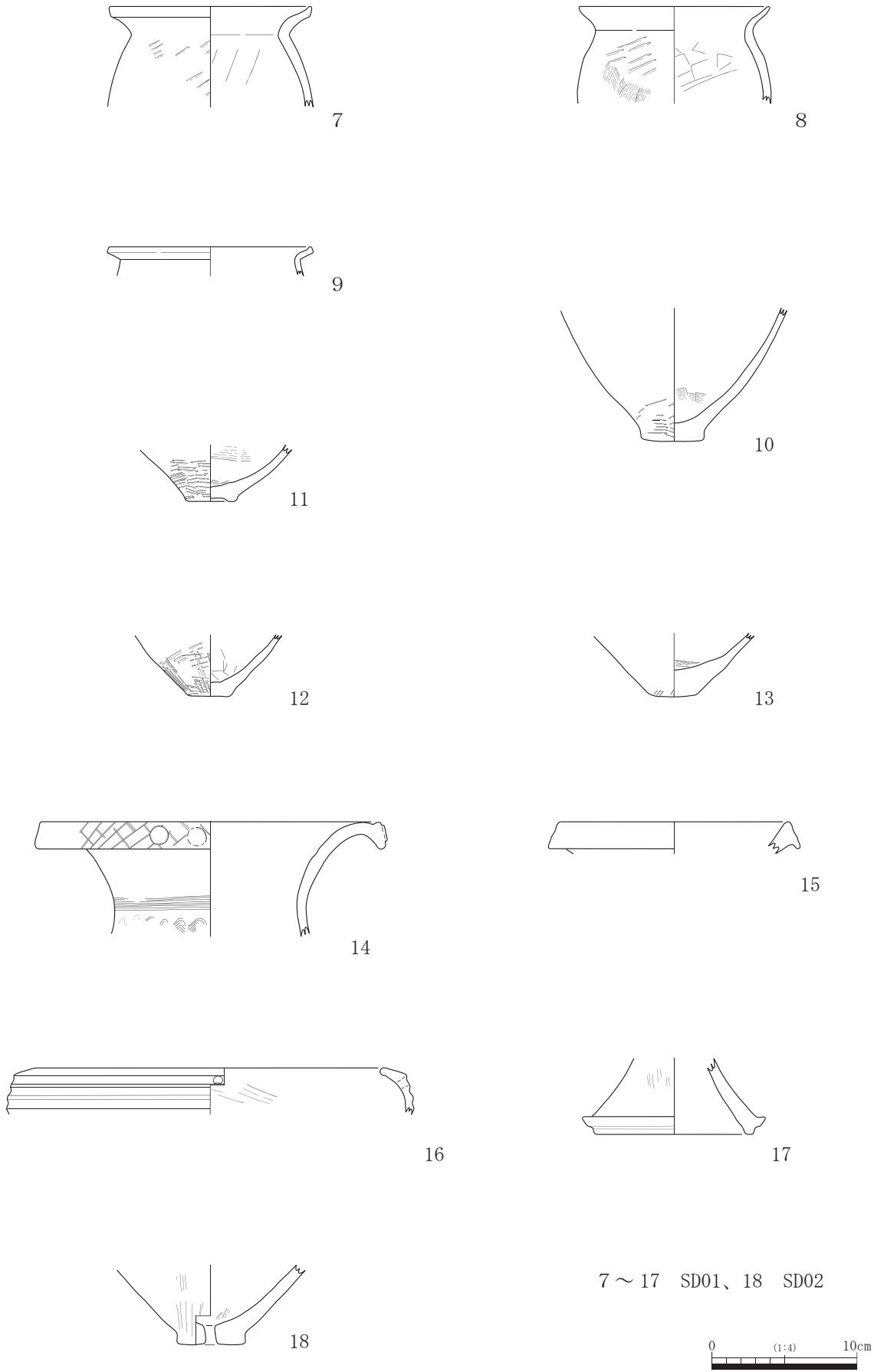


図13 SD01・02出土遺物

第3章 調査の成果

(4) 土坑

SKO1 (図14・15、図版5)

調査区の中央、西側に位置する。SK01・02は切りあっており、SK01が上位の遺構である。掘方は細長い楕円形で長幅1.61m、短幅0.55m、深さ15cmを測る。土坑内から古墳時代後期後半頃の須恵器甕・杯が出土地している。なお、本遺構からの出土遺物はIII-1b層出土遺物とも接合するものがある。とくに、後述する須恵器の大甕は遺構上面で検出していることから、III-1b層の堆積時に遺構上面が大きく削平され、散乱したと考えられる。そのため、この遺物は本遺構からの出土として、記述を行いたい。

19は須恵器杯蓋である。つまみを欠失するが器高の低い蓋で、口縁部はやや丸みをおび内部に返しはない。時期は8世紀ごろと思われる。20は須恵器大型の甕である。玉縁状の口縁部で、頸部はやや立ち気味である。口縁直下には凸帯があり、その下に2条の沈線を2度巡らし、間に波状文を施している。体部外面はタタキ痕、内面に当具痕を残す。

遺構の時期は、出土遺物から奈良時代と考えられる。

SKO2 (図14)

調査区の中央付近に位置する。SK01の下位で検出した土坑である。掘方は歪な楕円形で長幅1.6m、短幅0.8m、深さ20cmを測る。遺物は出土しなかった。

SKO3 (図16・17、図版6)

調査区の中央部西寄りに位置する。掘方は楕円形で長径2.5m、短径2.3m、深さ40cmを測る。断面は皿状で、遺構の周縁へ張り付くように須恵器杯蓋と身がほぼ完形の状態で出土している。

21～27は須恵器である。21～24は杯蓋である。21は焼成が悪く還元不足で、肩部に稜を巡らすが口縁端部に沈線はない。22は完形品で器高が高く、天井部外面に回転ヘラ切り痕を残す。23は歪みが大きく、内外面に自然釉が付着する。24は22と口径はほぼ同じであるが、器高が低い。25・26は杯身である。25は完形品で器壁が薄く、立ち上がりが低い。26は完形品で立ち上がりは低いが、見込みは深い。底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。27は甕である。口縁部は玉縁状で、自然釉が付着する。時期は21が6世紀中ごろ、他の遺物は6世紀末から7世紀初めごろと考えられる。

遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後半と考えられる。

第5節 包含層出土遺物

包含層および遺構から弥生土器、古墳時代後期後半から奈良時代・平安時代の須恵器、中世の須恵器、輸入陶磁器をはじめサヌカイト片、鉄釘などが出土している。

II層は、遺物の出土は希薄であるが古代～中世の須恵器片が目立つ。III-1a層は奈良時代および平安時代末から鎌倉時代の須恵器こね鉢、室町時代前期の中国製青磁碗などが出土している。下層のIII-1b層は弥生時代中期・古墳時代後期～奈良時代・平安時代の土器を含む。最下層のIII-2層は古墳時代後期後半土器が主体で、これに奈良時代や弥生時代中期の遺物が混ざる。

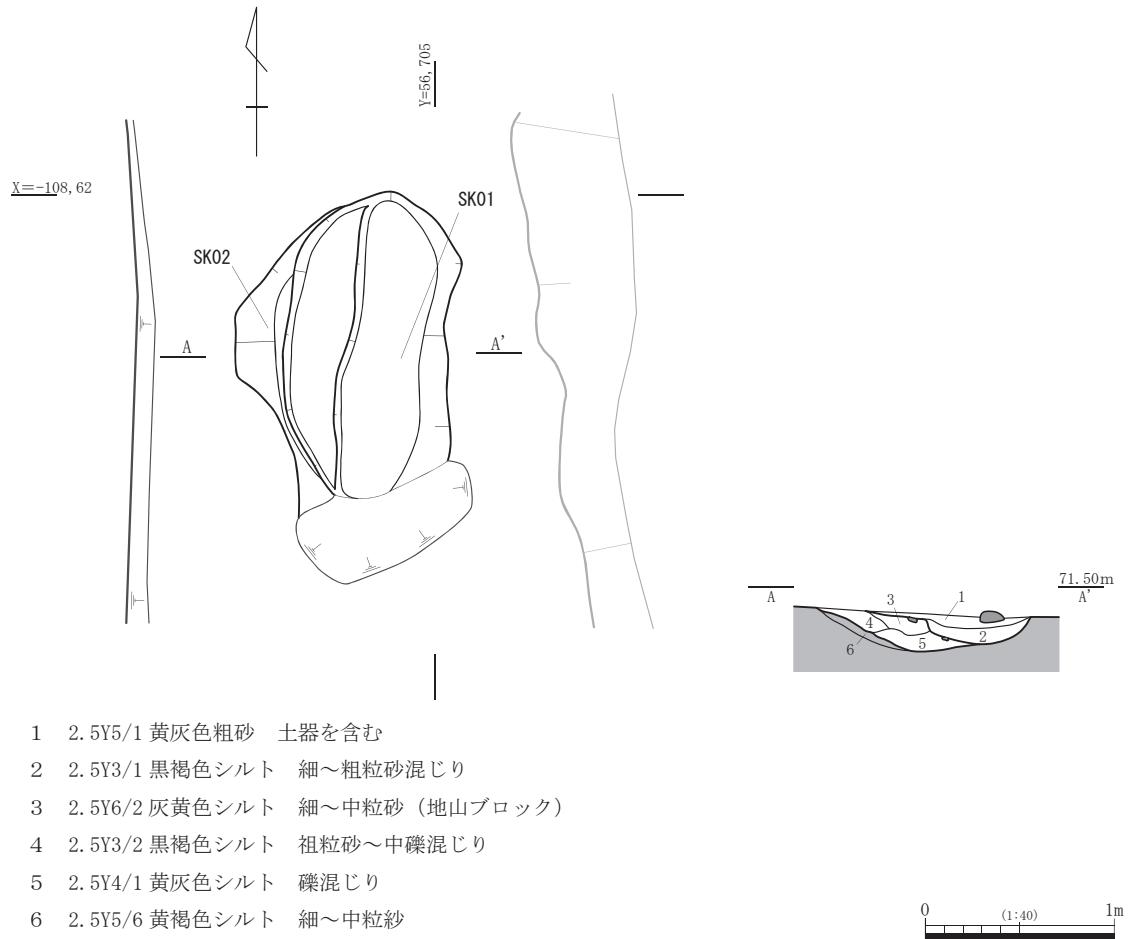


図 14 SK01・02 平面図・断面図

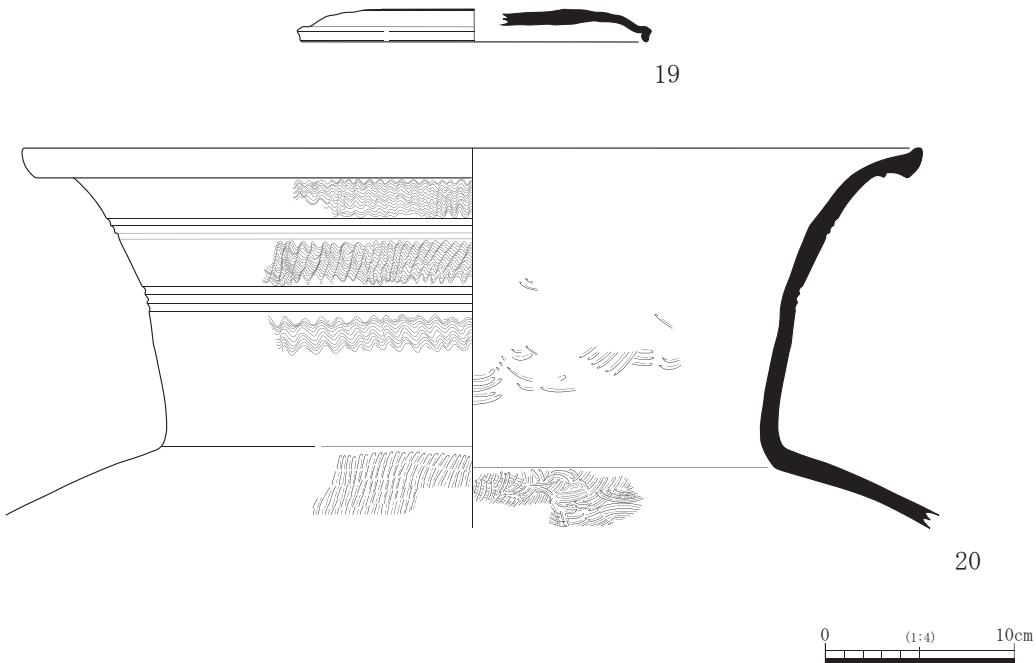


図 15 SK01 出土遺物

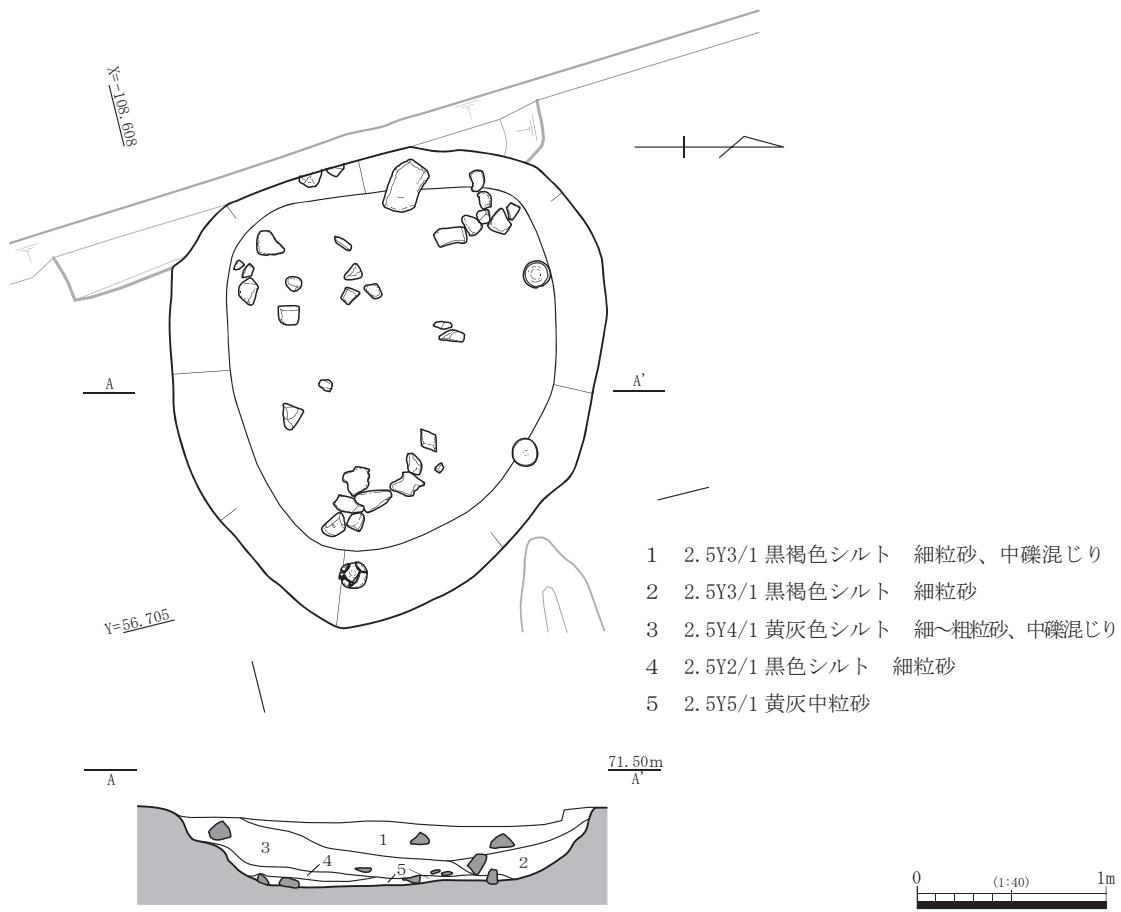


図 16 SK03 平面図・断面図

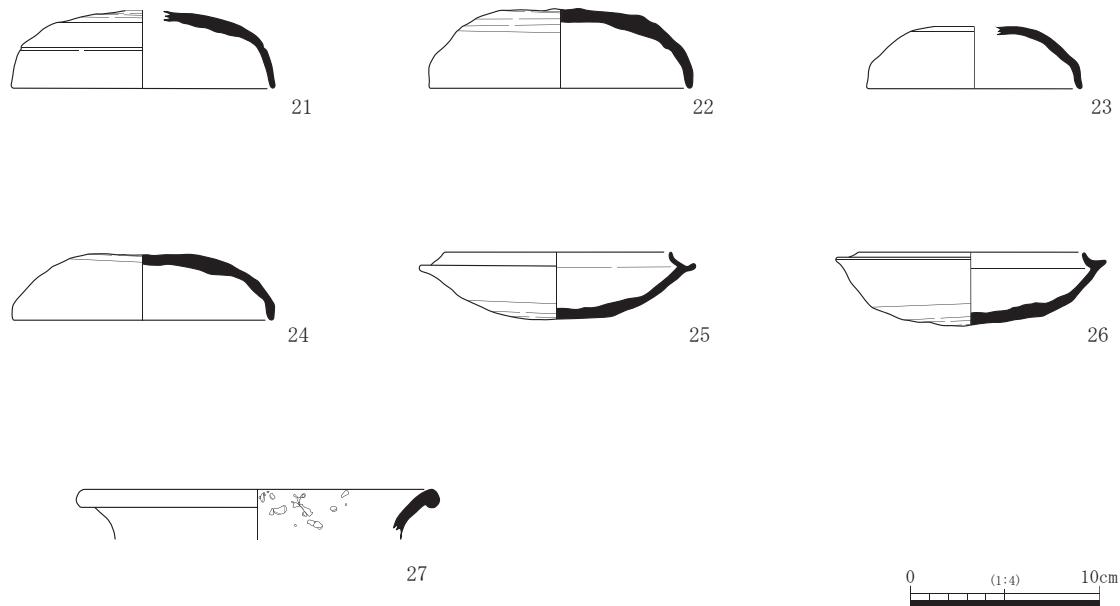


図 17 SK03 出土遺物

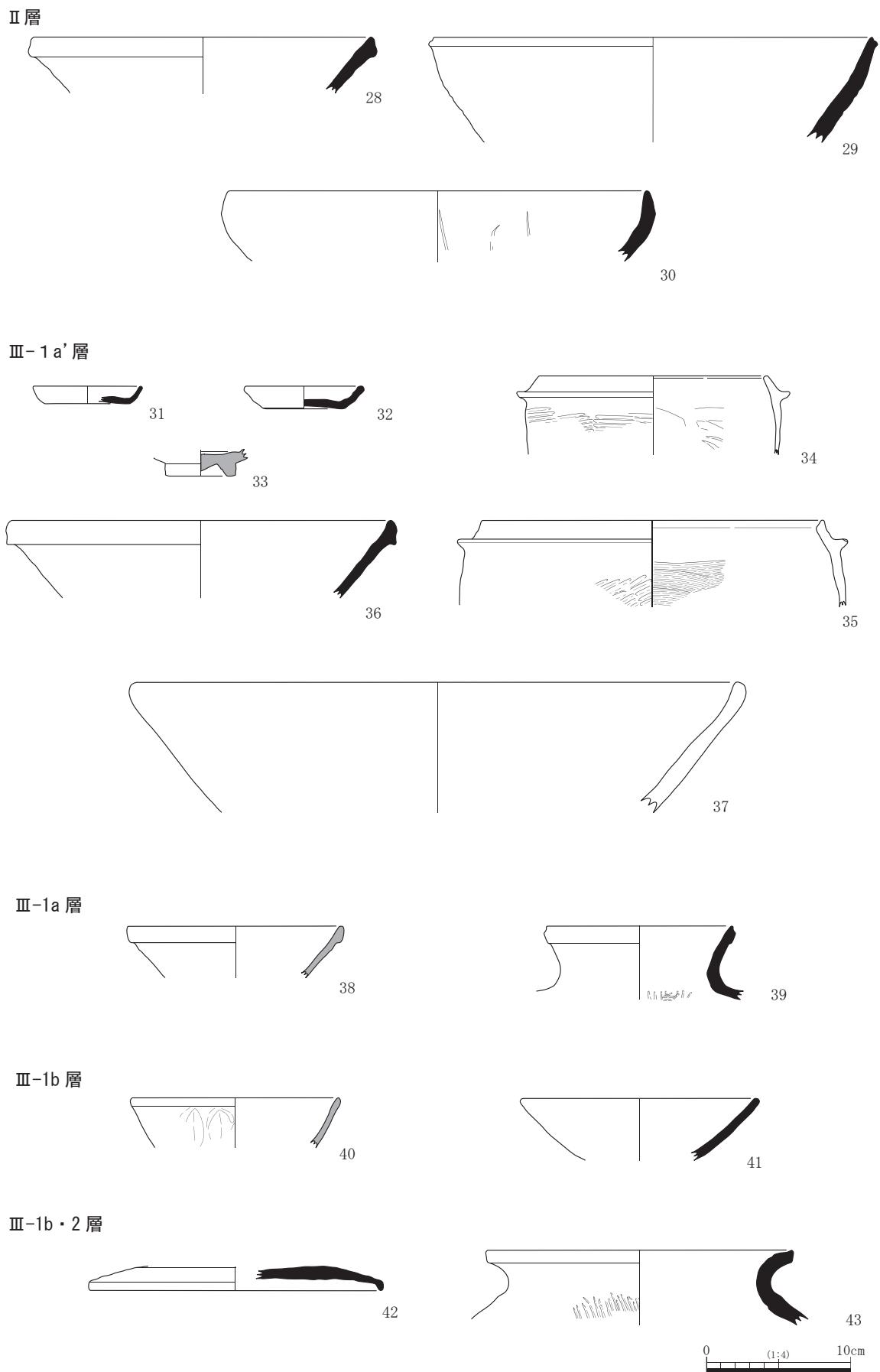


図18 包含層出土土器(1)

III-2層

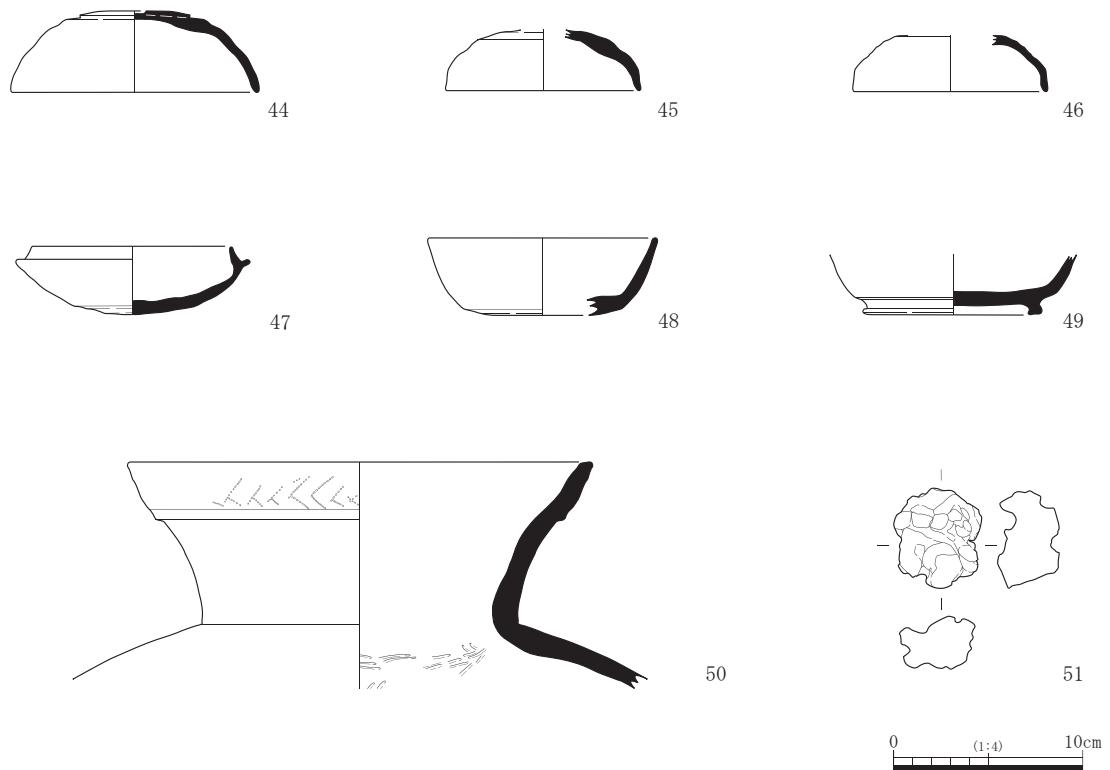


図19 包含層出土土器(2)

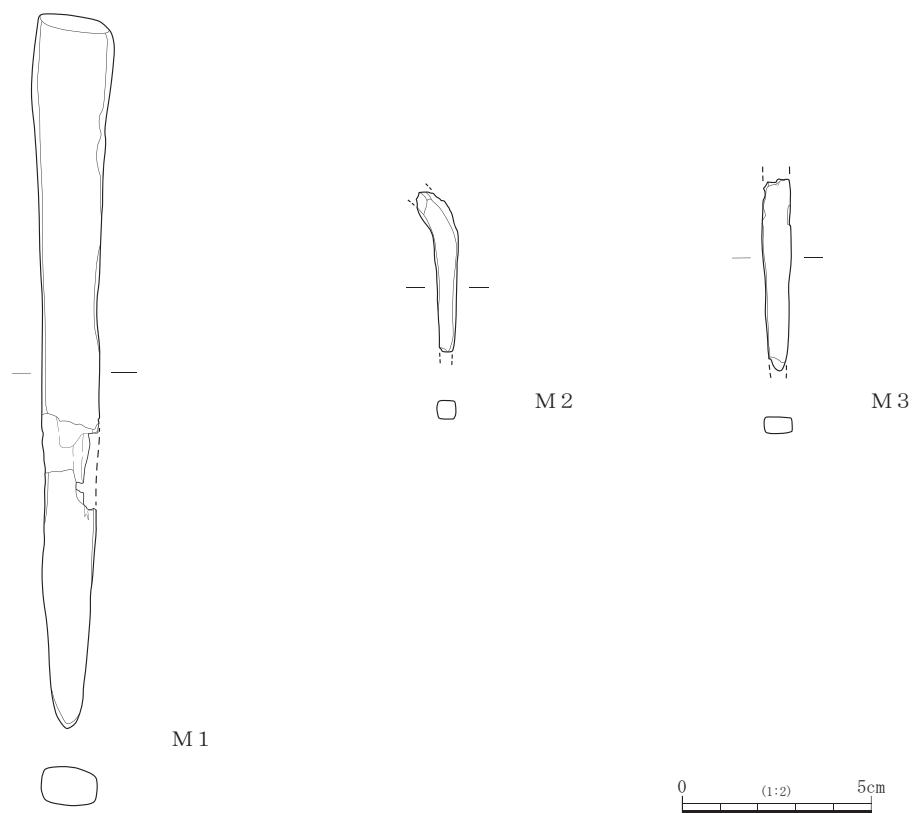


図20 鉄製品・鉄滓

第3章 調査の成果

番号	図版	調査区	遺構・層位	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整	備考
1		5区	SH01 トレンチ上層	須恵器 杯身	10.8 3.6	密	良好	内：10YR7/1灰白色 外：N7/0灰色	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ削り	残：1/2
2		5区	SH01 トレンチ上層	須恵器 杯身	(10.8) 3.4	密	良好	内：N8/0灰白色 外：2.5Y8/1灰白色、2.5Y7/1灰白色	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ削り	残：1/5
3		5区	SH01 トレンチ上層	須恵器 杯身	(11.5) 4.0	密	良好	内：N6/0灰色 外：N7/0灰白色、10YR5/1灰色	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ削り	残：1/5
4		5区	SH01 直上	須恵器 底部	(14.4)	密	良好	内：5B6/1青灰色 外：10GY6/1緑灰色	内：回転ナデ 外：回転ナデ	残：1/8
5		7区	P124 (SB01)	須恵器 杯蓋	(17.1)	密	良好	内外：N8/0灰白色	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ削り	残：1/8
6	7	7区	P125 (SB01)	土師器 甕	(15.6)	密	良好	内：10YR6/2灰黄褐色 外：7.5YR8/3浅黄橙色、10YR6/2灰黄褐色	内：ナデ 外：ハケ目	残：1/8
7	7	3区	SD01 ①層	弥生土器 甕	(13.8)	密	良好	内：10YR8/2灰白色 外：2.5Y8/2灰白色、10YR8/2灰白色	内：ヘラ削り 外：タタキ目	残：1/8
8		4区	SD01 ①層	弥生土器 甕	(13.0)	密	良好	内：10YR8/2灰黄褐色、10YR5/1褐色 外：10YR8/2灰白色、10YR8/3浅黄橙色	内：ヘラ削り 外：タタキ目、ハケ目	残：1/8
9		3区	SD01 ①層	弥生土器 甕	(13.8)	密	良好	内外：7.5YR5/4にぶい褐色、7.5YR7/6橙色	内：ナデ 外：ナデ	残：1/8
10		4区	SD01 ①層	弥生土器 甕	底 4.4 底部	密	良好	内：10YR6/2灰黄褐色、10YR5/1褐色 外：10YR8/2灰白色、10YR7/2にぶい黄橙色	内：ハケ目 外：タタキ目、底部に沈線痕	残：1/3
11	7	4区	SD01 ③層	弥生土器 甕	底 3.6 底部	密	良好	内：2.5Y8/3淡黄色、2.5Y5/1黄色 外：10YR5/1褐色、10YR8/2灰白色	内：ハケ目 外：タタキ目	残：1/3
12	7	4区	SD01 ①層	弥生土器 甕	底 3.1 底部	密	良好	内：2.5Y8/3淡黄色 外：2.5Y8/3淡黄色、2.5Y8/2灰白色	内：ハケ目 外：タタキ目	残：1/3
13	7	3区	SD01 ①層	弥生土器 甕	底 3.4 底部	密	良好	内外：2.5Y8/2灰白色、10YR7/2にぶい黄橙色	内：ハケ目 外：タタキ目	残：1/3
14	7	5区	SD01 ①層	弥生土器 壺	(23.3)	密	良好	内：2.5Y8/3淡黄色 外：2.5Y8/2灰白色、2.5Y8/3淡黄色	内：ナデ 外：口縁部円形浮文、斜格子文、体部直線文、波状文	残：1/4
15		5区	SD01 ①層	弥生土器 壺	(15.7)	密	良好	内外：2.5Y8/2灰白色	内：ナデ 外：口縁部回線文カ	残：1/8
16	7	5区	SD01 ①層	弥生土器 壺	(24.0)	密	良好	内外：10YR8/2灰白色	内：ハケ目 外：口縁部凹線文3条	口縁部に穿孔 残：1/8
17		4区	SD01 ①層	弥生土器 器台 裾部	底 12.6	密	良好	内外：2.5Y8/2灰白色	内：ヘラ削り 外：口縁部回線文、ミガキ	残：1/3
18	7	6区	SD02	弥生土器 甕	底 4.7 底部	密	良好	内：2.5Y8/2灰白色、2.5Y7/1灰白色 外：2.5Y8/3淡黄色	内：ハケ目 外：ミガキ	底部に穿孔 残：1/8
19		5区	SK01	須恵器 蓋	(18.2) (1.8)	密	良好	内：N7/1灰白色	内外：回転ナデ	残：1/4
20	8	5区	SK01、III-1b	須恵器 甕	(47.5)	密	良好	内：N7/0灰白色、N6/0灰色 外：N7/0灰白色、N4/0灰色	内：回転ナデ、当具痕 外：頸部に沈線と波状文、タタキ目	残：1/8
21	8	4区	SK03 上層	須恵器 杯蓋	(13.7) 4.2	密	不良	内：7.5YR7/3にぶい橙色 外：5Y8/2灰白色	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ削り	残：1/4
22	8	4区	SK03	須恵器 杯蓋	13.7 4.2	密	良好	内：N6/0灰色 外：N6/0、N7/0灰色	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ削り	残：完形
23		4区	SK03 下層 2・3	須恵器 杯蓋	(11.2) 3.3	密	良好	内：N7/0灰白色 外：N5/0灰色	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ削り	残：1/6
24	8	4区	SK03 上層	須恵器 杯蓋	13.6 3.5	密	良好	内：N8/0灰色 外：5Y7/1灰白色	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ削り	残：2/3
25	8	4区	SK03	須恵器 杯蓋	11.9 3.6	密	良好	内：5Y7/1灰白色、7.5Y6/1灰色 外：N7/1灰色、2.5Y8/1灰色	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ削り	残：完形
26	8	4区	SK03	須恵器 杯蓋	11.9 3.9	密	良好	内：5Y6/1灰色、N6/0灰色 外：7.5GY6/1緑灰色、7.5Y6/1灰色	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ削り	残：完形
27		4区	SK03 上層	須恵器 甕	(18.4)	密	良好	内：2.5Y7/1灰白色 外：2.5Y8/1灰白色	内：回転ナデ 外：回転ナデ	残：1/6
28	9	7区	II	須恵器 鉢	(23.4)	密	良好	外：N7/1灰白色	内：回転ナデ、ナデ 外：回転ナデ	残：1/3
29		8区	II	須恵器 鉢	(30.4)	密	良好	内外：N6/0灰白色	内：回転ナデ 外：回転ナデ	残：1/8
30		8区	II	陶器 すり鉢	(28.9)	密	良好	内：5YR6/4にぶい橙色、5YR5/1褐色 外：10YR7/1灰白色、5YR7/4にぶい橙色	内：おろし目3条、回転ナデ 外：回転ナデ	残：1/8
31	9	1区	III-1a'	須恵器 小皿	(7.4) 1.2	密	良好	内外：N7/0灰白色	内外：回転ナデ、回転糸切り	残：1/4
32	9	1区	III-1a'	須恵器 小皿	(8.0) 1.6	密	良好	内外：N8/0灰白色	内外：回転ナデ、回転糸切り	残：1/3
33	9	1区	III-1a'	青磁 碗	(4.5) 高台部	密	良好	内外：7.5Y6/2灰オリーブ色 断面：7.5Y7/1灰白色	外：削り出し高台	残：1/8
34		1区	III-1a'	土師器 鍋	(15.6)	密	良好	内：7.5YR7/2明褐灰色、7.5YR7/3にぶい橙色 外：7.5YR4/2灰褐色、7.5YR4/1褐色	内：板ナデ 外：タタキ	残：1/4
35		1区	III-1a'	土師器 鍋	(23.6)	密	良好	内：7.5YR5/4にぶい褐色 外：7.5YR6/4にぶい橙色	内：ハケ目 外：タタキ	残：1/8

表1 出土土器観察表(1)

第3章 調査の成果

番号	図版	調査区	遺構・層位	器種	法量	胎土	焼成	色調	調整	備考
36		1 区	III-1a'	須恵器 鉢	(26.3)	密	良好	内外:N6/0灰色	内外:回転ナデ	残:1/8
37		5 区	III-1a'	陶器 鉢	(41.8)	密	良好	内:5YR6/4にぶい橙色 外:5YR7/6橙色	内:回転ナデ、ナデ 外:回転ナデ	残:1/8
38		2 区	III-1a	白磁 梗	(14.8)	密	良好	5Y8/1灰白色		玉縁状 残:1/8
39	9	5 区	III-1a	須恵器 壺	(12.7)	密	良好	内:2.5Y4/1黄灰色 外:5Y5/1灰色	内:当具痕 外:回転ナデ、自然釉付着	残:1/3
40	9	3 区	III-1b	青磁 梗	(14.4)	密	良好	7.5GY7/1明緑灰色		鏃連弁 残:1/8
41		8 区	III-1b	須恵器 梗	(16.0) (4.3)	密	良好	内:N8/1灰白色 外:N7/1灰白色	内外:回転ナデ	残:1/8
42		4 区	III-2、1b	須恵器 杯B 杯蓋	(20.2)	密	良好	内外:N8/0灰白色	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラ削り	残:1/8
43		4 区	III-2、1b	須恵器 壺	(21.0)	密	良好	内:N8/1灰白色 外:10YR7/1灰白色	内:回転ナデ 外:タタキ目、自然釉付着	残:1/8
44	9	3 区	III-2	須恵器 杯蓋	(12.9) 4.3	密	良好	内:N8/0灰白色 外:2.5Y8/1灰白色	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラ切り	残:1/3
45	9	2 区	III-2	須恵器 杯蓋	(10.2)	密	良好	内:N8/0灰白色 外:7.5Y8/1灰白色、N8/0灰白色	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラ切り	残:1/4
46		2 区	III-2	須恵器 杯蓋	(10.2)	密	良好	内:N7/0灰白色	内:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラ削り	残:1/8
47	9	2 区	III-2	須恵器 杯身	10.5 3.6	密	良好	内:N8/0灰白色 外:2.5Y8/1灰白色	内:回転ナデ 外:回転ヘラ切り	残:3/4
48	9	2 区	III-2	須恵器 杯A	(11.9) 4.1	密	良好	内:N8/0灰白色 外:N8/0灰白色、N7/0灰白色	内:回転ナデ 外:回転ヘラ切り	残:1/5
50		3 区	III-2	須恵器 壺	(24.2)	密	良好	内:N8/0灰白色、N7/0灰白色、自然釉付着 外:N8/0灰白色、自然釉付着	内:当具痕 外:口縁部に綾杉文状の刺突文、回転ナデ	残:1/8
51		2 区	III-2	須恵器 不明陶器	長幅5.3 短幅4.6 厚3.3	密	良好	2.5Y8/1灰白色、10BG5/1青灰色	窓体カ	窓体カ

表2 出出土器観察表(2)

番号	図版	調査区	遺構・層位	器種	法量(cm)	重さ(g)	備考
M1	10	5 区	III-1b	釘カ	長(18.9) 幅2.0 厚1.0	116.5	
M2	10	5 区	III-1b	釘	長(5.1) 幅1.75 厚0.45	2.8	
M3	10	2 区	III-2	釘	長(4.2) 幅0.5 厚0.5	2.3	
M5	10	5 区	III-1b・2	鉄滓	長3.5 幅3.0 厚3.1	2.94	
M6	10	5 区	III-1b・2	鉄滓	長5.0 幅3.5 厚2.4	30.6	
M7	10	5 区	SH01	鉄滓	長2.5 幅2.5 厚2.7	12.0	床直上

表3 出土鉄製品観察表

第4章 総括

はじめに

新規発見された前島・検上田遺跡では、はじめての本格的な調査となつた。本調査から扇状地の先端に古墳時代・古代・中世の遺構が検出され、大きな成果をあげることができた。これら成果をまとめた総括を行いたい。

第1節 遺構の変遷

遺構・層序と出土遺物の検討から、遺構を4つの時期に分けることができた。

I期 古墳時代の集落 古墳時代後期の竪穴住居SH01と円形の土坑SK03を検出した。扇状地の高い地形を利用した集落の先端を検出したと思われる。調査区北側にある低地の堆積は攪拌されており、集落の北側で水田を営んでいた可能性がある。

II期 古代の開発、条里の整備 西側の高い部分と東側の低い部分との境に溝SD01がある。この溝には等間隔に東西方向の支流が取り付いており、水田開発が行われたと考えられる。

III期 土石流と崩壊 西側谷部から供給された土石流III-1b層とSD03の溢流により、開発された条里区画が破壊される。

IV期 中世の再開発 破堤により溝は埋没したが、新たに水田が整備され建物SB01が建てられた。

なお、溝の使用や埋没の時期は、遺構の性格上比定することが難しい。溝SD01とその支流については、出土遺物は周辺に存在する遺跡からの混入であるが、10～12世紀ごろには埋没したと考えられる。

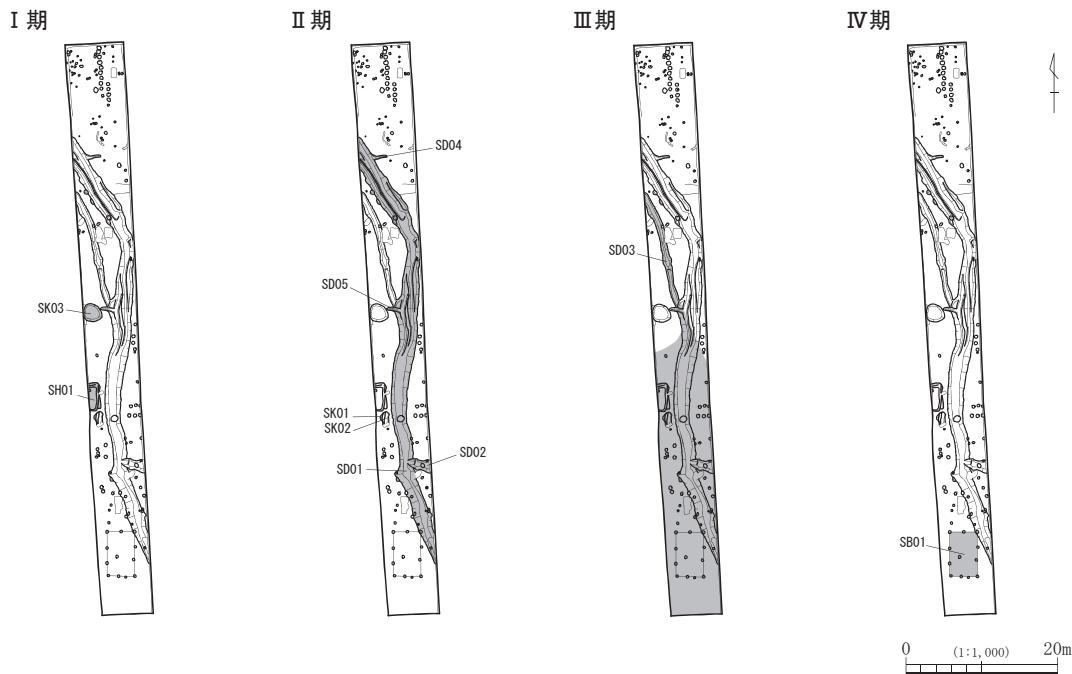


図21 遺構の変遷

第2節 条里遺構とSD01

現行の用水路との関係 調査区外へ延びる溝 SD01 の流れを上流の北側へ延長すると、現行の用水路があり、繋がっていたと思われる。

その先は高低の境を緩やかに曲がり、東西方向の用水路へ接続する。その後、県道 296 号に沿って北上して野中町との境付近で東へ曲がり、さらに北上してハゼノ木遺跡の西方建物群（倉庫群）の東側へ至る。

支流と間隔 前述したように、SD01 は高低の境を等高線に沿って、蛇行しながら流れている。この溝へ接続する支流 SD02・04・05 は南北に約 20 m の間隔を開けて掘られていることから、区画の存在が考えられる。

間隔を詳細にみると SD04 - 05 間が 20.4 m、SD05 - 02 間が 20.8 m あり、条里区画の半折型で使われる 1 段の短辻、12 歩 (21.8 m) に使い数値を示している。このことから、支流は条里遺構に一連する施設であると考えてみたい。また、調査区の北辺で東へ折れ曲る現行の水路も同様の間隔にあり、条里遺構の位置を踏襲したと思われる。



図 22 条里遺構と SD01

まとめ

播磨では加古川を中心に良好な条里遺構が残っている。本遺跡の東側を流れる加古川の支流、杉原川周囲にも条里遺構が残っており、本調査からもその一端を検出することができた。本遺跡は『播磨国風土記』の都麻里、『和名類聚抄』の多可郡資母郷に比定されている。さらに調査例が蓄積することにより、古代の開発の状況が解明されるであろう。

また、出土遺物から周辺の西側には弥生時代の遺跡が拡がっていることが分り、本遺跡はさらに広い範囲にわたる複合遺跡と考えられる。

参考文献

- 服部昌之 1973 「条里地割の分布からみた古代播磨の地方行政領域」『人文研究』25(12) 大阪市立大学文学部紀要（人文研究）
- 谷岡武雄・山田安彦 1954 「東播磨（加古川・明石流域）の条坊（里）について」『地理学評論』27(7・8) 日本地理学会
- 西脇市史編纂委員会編 1983 『西脇市史』本編 西脇市役所
- 西脇市教育委員会・多可町教育委員会編 2020 『西脇・多可の古代』

写 真 図 版



写真図版 1



調査区全景（南から）



調査区北側（北から）

写真図版 2



SH01 検出状況（東から）



SH01 完掘状況（東から）

写真図版 3



SH01 遠景（北東から）



SB01 完掘状況（南から）

写真図版4



SD01 · 03 完掘状況（北から）



SD01 土層断面（南から）

写真図版 5



SK01 遺物出土状況（東から）



SK01 完掘状況（東から）

写真図版 6

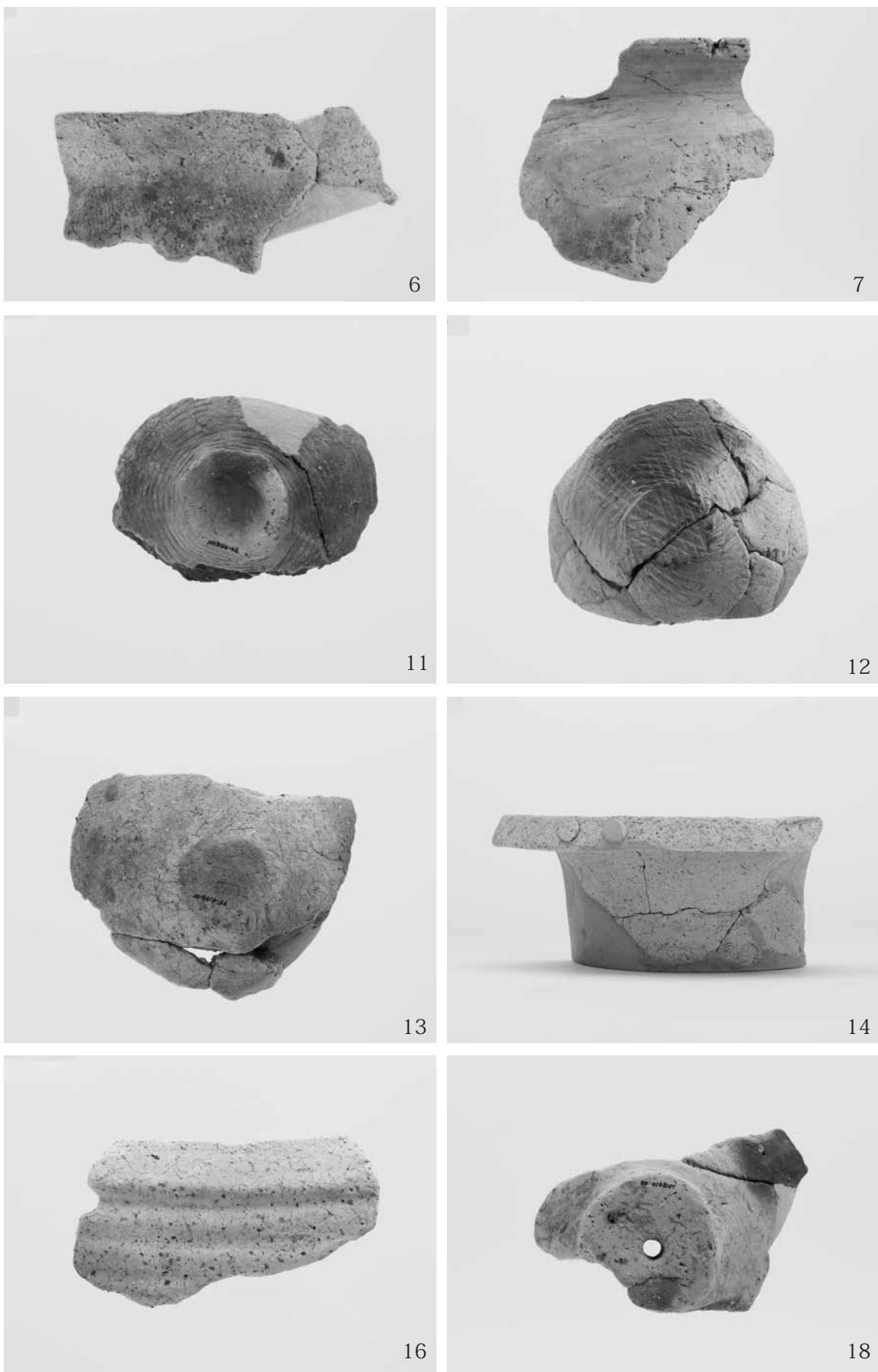


SK03 遺物出土状況（東から）



SK03 遺物出土状況（南から）

写真図版 7



6 SB01(P215)、7・11・12・14・16 SD01 第1層、13 SD01 第2層、18 SD02

出土遺物 (1)

写真図版 8



20



21

22



24

25



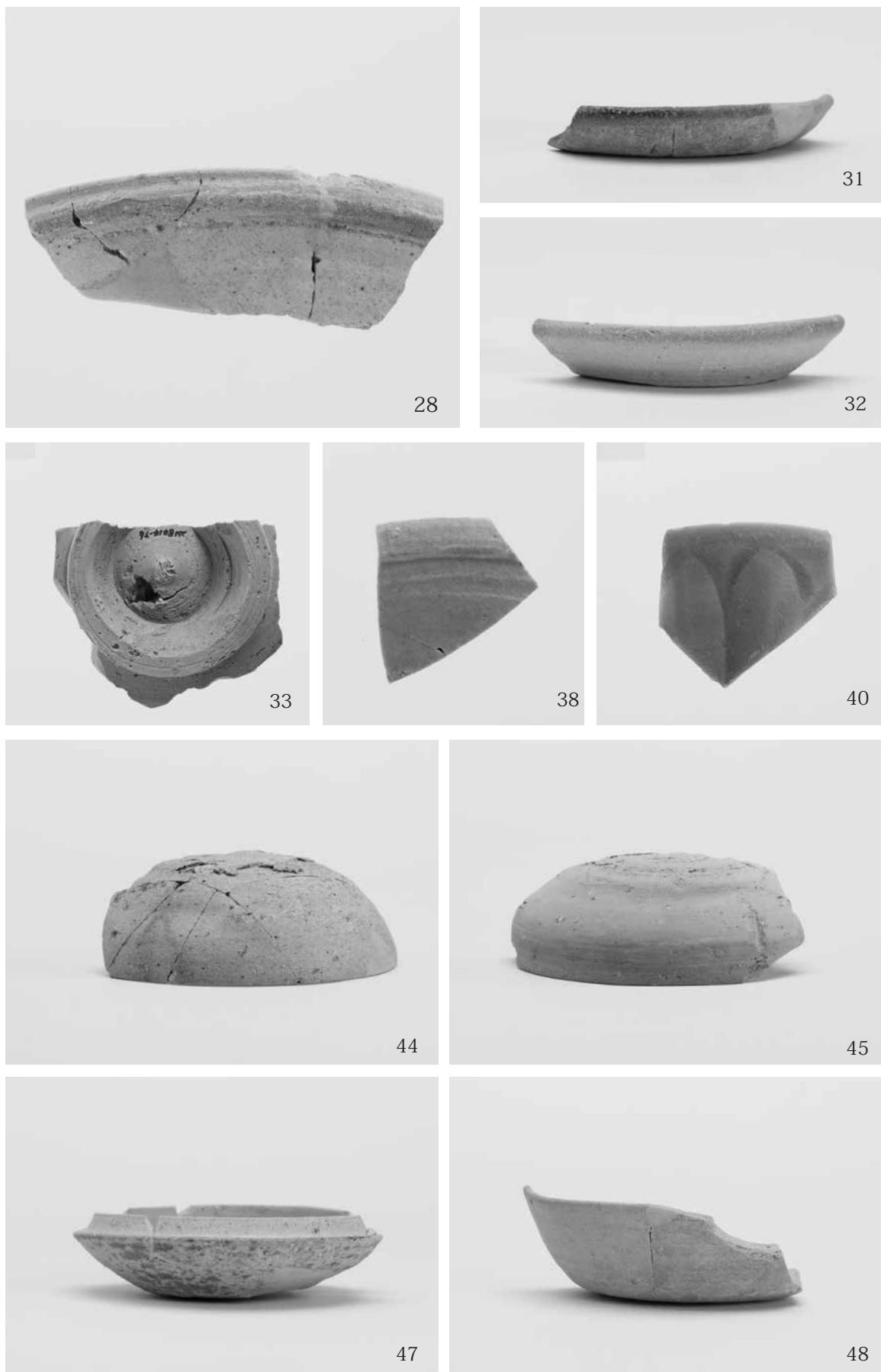
26

20 SK01

21・22・24・25・26 SK03

出土遺物 (2)

写真図版 9

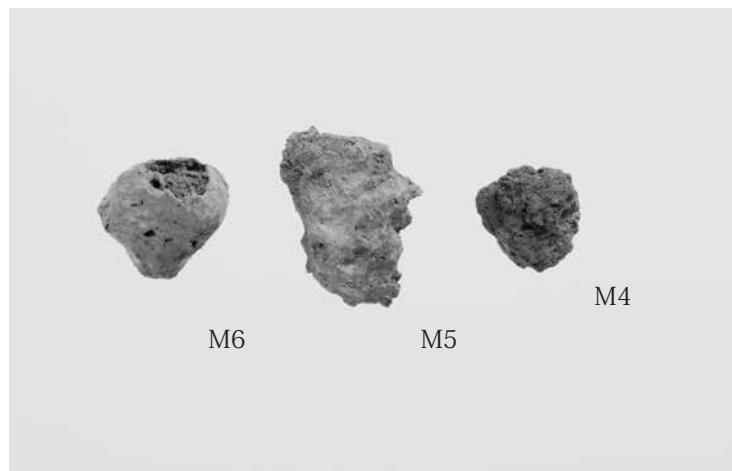


28 II層、31・32・33 III-1a'層、38 III-1a層、40 III-1b層

44・45・47・48 III-2層

出土遺物 (3)

写真図版 10



出土遺物 (4)

報告書抄録

兵庫県文化財発掘調査報告 第513冊

西脇市

前島・検上田遺跡

発 行 2020年3月25日

編 集 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

埋蔵文化財調査部

発行者 兵庫県教育委員会

〒650-8567

兵庫県神戸市下山手通5丁目10番1号

電話(0857)26-7525

印 刷 菱三印刷株式会社
